國學院大學学術情報リポジトリ

『日本考』所収和歌考釈其二：民間伝承を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 『日本考』, 和歌, 民間伝承 キーワード (En): 作成者: 胡, 暁☒ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000057

『日本考』所収和歌考釈其二
——民間伝承を中心に

A Study of Wakas in *Nihon Kō*: Folklores Centered

胡　暁　暉

キーワード：『日本考』　和歌　民間伝承
Key Words: ***Nihon Kō***　Wakas　folklore

要旨

『日本考』は和歌、歌謡、漢詩などの文学様式を紹介し、特にその中に39首の和歌が収録されていることが注目を集めている。これらの和歌の出典は多様性を有し、和歌集、物語、仮名草子、謡曲及び民間伝承に散在する。本書における「新歳挙筆」、「武蔵無山」、「暴雨譬瘡」はある伝承と結びつき、古くから民間に広まっていて、現在になっても知名度がある。本稿はこの三首の和歌を中心に、歌に関する伝承を述べ、流布過程に生じた変化を分析し、同書の編纂者が歌を解読する際に存する問題などについて検討した。最後に、和歌部分の音注漢字の特徴に触れた。

Abstract

Nihon Kō, introduces such Japanese literary styles as Wakas, ballads and Chinese poems, and what is particularly striking is the 39 Wakas included. These Wakas may not only derive from Waka collections, but also from stories, ballads and folklores. Three Wakas including Sinsaikyohi, Musasimusan, bōuhisō, which are from folklores, are selected as research texts in this paper. Based on exploring their folklores, and explaining the folklores related to these Wakas, analyzing the changes in the process of circulation, the author discussed the problems existing in the interpretation of Wakas by the editors of this book. Finally, this paper analyzed the characteristics of phonetic transcription on Chinese characters.

はじめに

『日本考』所収の39首の和歌の出典は多様性を有し、和歌集、物語、仮名草子、謡曲及び民間伝承などに散在する。その中で、民間伝承と結びついて広まった和歌が収録されているのは意味深い。この種の和歌が中国に伝わったのは、日本側の伝播者である海賊と関係がある。文学伝播の効果は交流双方の素養によって決定される。『日本考』には民間伝承に由来したものまで記録され、和歌の出典は非

体系的という特徴を持っている。

また、『日本考』に所収の和歌は独特な方法で記録されている。歌は図１のように「タイトル」、「歌辞」、「呼音」、「読法」、「釈音」、「切意」という六つの部分に分けられた。タイトルは原歌がないものであるが、歌の主旨としてつけられた。「歌辞」は和歌の内容であり、変体仮名と仮名の発音に近い漢字で表された。「呼音」は和歌における自立語の読み方で、「読法」は歌全体の読み方である。「釈音」は各単語の意味と用法を解釈し、「切意」は和歌を漢訳された。この記録方法はすでに拙稿「『日本考』所収和歌考釈――私撰集を中心に」（『東アジア文化研究』第７号、2022）において紹介しており、詳細はそちらをご参照されたい。

本稿は民間伝承に由来した和歌に絞り込み、「新歳挙筆」、「武蔵無山」、「暴雨譬瘡」を例として検討する。

一、新歳挙筆

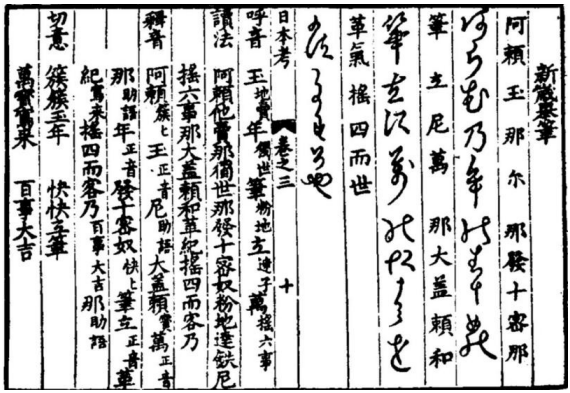

図１　「新歳挙筆」(1)

【翻刻】

阿頼玉　那　尓注一那發十密那注二　筆立尼萬那大盖頼和革氣揺 四而世注三

あら玉　の　年　のはじめの　筆立に萬のたからをかきよ する也

呼音　玉地賣注四　年獨世　筆粉地注五　立達子　萬揺六事

読法　阿頼他賣那獨世那發十密奴粉地達鉄尼揺六事那大盖頼和革紀揺

(1)　万暦刊本影印『日本考』による。以下同。

四而客乃

釈音　阿賴$_{簇々}$玉$_{正音}$[注六]尼$_{助語}$大盖賴$_{寶}$萬$_{正音}$那$_{助語}$年$_{正音}$發十密奴$_{快々}$筆立$_{正音}$革紀$_{寫来}$揺四而客乃$_{百事大吉}$[注七]那$_{助語}$

切意　簇々玉年　快々立筆　萬寶寫来　百事大吉

（簇々たる玉年　快々として筆を立つ　萬寶寫し来り　百事大吉）(2)

【注釈】

注一：渡辺三男(3)によると、「尓」は「年」の誤り。

注二：「發十密那」（はじめの）であるが、「讀法」と「釋音」は「發十密奴」（はじめぬ）である。「那」と「奴」の発音が近いことによる間違いと思われる。また、「釋音」に「快々」と解するのは誤訳である。

注三：渡辺三男(4)によれば、「世」は「也」の誤り。

注四：「玉$_{地賣}$」。内閣文庫本『日本風土記』(5)も「地賣」と記されたが、玉の発音は「たま」で、同書「以路法四十八字様$_{音註}$表」(6)によると、「た」の発音は漢字「打他大坦達答帯」で表記され、ゆえに「地賣」は「他賣」の誤りである。また、「読法」の部分も「他賣」と表記される。

注五：「筆$_{粉地}$」。「筆」は「ふで」である。「以路法四十八字様$_{音註}$表」は清濁変用を前提として、これによると、「ふ」の漢字表記は「復勿福否卜北」であり、「粉」はそれ以外の漢字である。しかし、このような用例は少なくない。例えば、本巻２番目歌「松風攪睡」に「ふく」は「拂古」であり、５番目歌「冬花春発」に「ふゆ」は「伏由」である。また、表によると、「て・で」の音注漢字は「天鉄畳敵迭佚牌(7)」であり、それに対して、「ち」の音注漢字は「地七之吃即席」である。ここに「地」で「で」を使用しているのは、大友信一氏によると、「え」段と「い」段との類似を示すものである。(8)

---

(2)　漢訳の読み下しは渡辺三男氏の『新修訳注日本考』（新典社、1985）による。以下同。
(3)　渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985、P142。
(4)　渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985、P142。
(5)　明･侯継高『全浙兵制考』の付録である。『日本考』の内容は『日本風土記』とほぼ同じであり、一書二刻とされている。
(6)　本表は『日本考』巻之三の巻首にある。編者は仮名の発音を漢字で記され、書き方もつけた。本巻における和歌の「呼音」と「読法」などの読み方はこの表に基づいて展開する。
(7)　渡辺三男によると、「牌」は「牒」の誤りか。
(8)　大友信一.『室町時代の国語音声の研究』、至文堂、1963、P564。

注六：阿頼玉（あらたま）。「玉$_{正音}$」の「正音」はこの語の意味は中国語と同じであること。「あらたまの」は「新玉の」あるいは「荒玉の」と表記され、枕詞として普通に翻訳されない。「年」・「月」・「日」・「春」などにかかるが、かかる理由は未詳。中国は枕詞のような翻訳されなくてもかまわないものがないため、しいに「あらたまのとしのはじめの」を「簇々玉年」と翻訳した。「簇々」は群がっている意味であり、「玉年」は妙齢という意味で、特に十六歳の女子のことをさす。例えば、『全唐詩』巻五百六十九李群玉「酔後贈二馮姫一」の「桂形浅拂二梁家黛一、瓜字初文二碧玉年一」がある。また、「はじめの」は訳漏れされた。

注七：「革紀揺四而客乃」（かきよするかな）。「かき」は動詞「書く」の連用形であり、「よ」は間投助詞であり、「する」はサ変動詞「す」の連体形である。「かな」は終助詞で、詠嘆の意を表し、原文に「也」と表記される。しかし、「也」という字は普通に「なり」と読み、「かな」の音注漢字になれない。また、「かな」は普通に「哉」と表記されている。故に、この句は「百事大吉」という意味ではない。

【原典】

筆者の調べた限り、文献にまだ見出せないが、民俗には見られる歌である。本和歌は「六郷のカマクラ」という祭りの「天筆」という行事に関わっている。(9)

「六郷のカマクラ」は、2月11日から15日にわたって行う。豊作、安全繁栄を祈る「年ごい」と凶作や不幸を除去する「悪魔払い」、その年の吉凶を占う「年占い」の三者が一体となった行事である。この行事は鎌倉時代から京都御所清涼殿の東庭で行われた天皇の吉書焼きの「左義長」の遺風を六郷の地頭二階堂氏が当地に移したものといわれている。「左義長」は小正月に行われる火祭りの行事であり、『徒然草』第180段に見られる。この吉書が「天筆」であり、これを青竹につけ「左義長」に模して正月の松かざりに点火して焼いたのが「カマクラ」である。それが豊作祈願の火祭りとして700年余りも続いている。

天筆は11日に行う。子どもたちは11日、天筆を書いて翌日に備える。この天筆に書く文句はいろいろな例がある。例えば、「奉納鎌倉大明神 天筆和合楽 地福

(9) 「六郷のカマクラ」という行事の紹介はJCTO日本伝統文化振興機構のホームページを参考にした。http://www.jtco.or.jp/bunkakan/?act=detail&id=85&p=0&c=19　2022年7月8日閲覧。

円満楽 々々 新玉の年の始めに筆とりて万の宝かくぞあつむる 何年正月吉日 氏名 年齢 敬白」[10]である。天筆は「吉書」で、つまり書初めである。

また、福島邦道氏の研究[11]によれば、長野県生まれの春日政治は「歳次聯想」に次のような書初めの歌をあげている。

> 自分等の幼少な時分、歳首には必ず試筆――いや試筆などいふものではない、書初めといふものを親たちから強ひられたことである。それは、
>
> 吉　書　始
>
> あら玉の年の始に筆とりて万の宝我ぞかき取る
>
> といふ形式に半紙に書いて、恵方棚に張下げたものである。「万の宝我ぞかきとる」はすこし鄙俗であると思ふが、斯様な風習の失はれて了つた今から考へると、かうした些細な事も懐かしい一つである。[12]

この歌も『日本考』のものと比べると、語句に多少のちがいはあるが、根本は同じで、当時の民俗を反映しているものと思われるのである。中世以後にこの歌はおそらく広く伝わっていただろう。中国は旧正月（春節）が重視し、年のはじめに一年の幸せを祈り、この歌は中国の文化心理に合っている。それはこの和歌が収録された理由だと考えられている。

【原典との対比】

『日本考』に記載された歌（以下は［日］と略称する）、「六郷のカマクラ」（以下は［六］と略称する）に見える歌及び「歳次聯想」（以下は［歳］と略称する）にあげていた歌はそれぞれ違っている。

第二句は、［六］と［歳］は「年のはじめに」であるが、［日］は「年のはじめの」になってしまい、助詞が変わった。

第三句は、［六］と［歳］は「筆とりて」であるが、［日］は「筆立に」になる。「筆立」は「筆を立つ」という意味で、筆をとって書くことをさすか。

第五句は、［六］は「かくぞあつむる」であり、「ぞ」は係助詞で、「かく」を特に

---

(10) JCTO日本伝統文化振興機構ホームページ：http://www.jtco.or.jp/bunkakan/?act=detail&id=85&p=0&c=19　2022年7月8日閲覧。
(11) 福島邦道.「明代中国文献に見える日本の詩歌」、『言語と文芸』三九、1965-3。
(12) 春日政治.『春日政治著作集』8『青靄集』、勉誠社、1985、pp79～80。

強く示すためのものである。[歳] は「我ぞかき取る」であり、係結びも使い、「我」を強調する。[日] は「をかきよする也」になったが、日本語文法に合わない。特にこの句は8字になってしまい、中国人の編纂者は和歌の「字余り」という修辞法に詳しくなかった可能性が高いため、ここでは歌の形式に注意を払わなかったわけである。

【翻訳】

年の初めに筆をとって七珍万宝を書くと、これらの宝を手に入れる。

切意の「百事大吉」は加訳であり、「簇々玉年」は誤訳である。また、「はじめの」の部分は訳漏れである。

二、武蔵無山

図2　「武蔵無山」

【翻刻】

木索失野外月那入別紀山木乃失草揺里出鉄草尼箇所入

むさし野は月の入べき山もなし草より出て草にこそ入

呼音　野[那外][注一] 月[紫氣] 入[一而] 山[陽脉] 草[骨節][注二] 出[一送][注三]

読法　木索失那外紫氣那一而別紀陽脉木乃失骨蒔揺里一迭鉄骨蒔尼箇所一而

釈音　木索失[武蔵州]野[正音]紫氣[月]那[助語]入[正音]別紀[島][注四]山[正音]木乃失[無][注五]草[正音]揺里[裡][注六]出[正音]草[正音]尼[助語]箇所[底]入[正音][注七]

切意　武蔵州 無山島 月出出野草 月入入野草

（武蔵州 山島無し 月出づるには野草より出で　月入るには野草に入る）

【注釈】

注一：「那外」（のは）は、「野」のみならず、係助詞「は」も含めている。

注二：渡辺三男[13]によると、「骨節」は「骨蔀」の誤り。

注三：歌辞及び「読法」によれば、「一送」は「一迭」の誤り。

注四：「別紀」（べき）は推量の助動詞「べし」の連体形で、「島」ではない。『日本考』における音注漢字法によれば、「島」を表す音注漢字は「濕脉」の類である。

注五：木乃失（もなし）は係助詞「も」プラスシ形容詞「なし」であり、「木助語」を指摘されなかった。

注六：「揺里」（より）は格助詞で、此歌には動作・作用の空間的な起点を表す。「……から」の意であり、「裡」は誤訳である。

注七：「箇所」（こそ）は係助詞で、その語句を特に取り立てて強く指し示す意を表す。係り結び形式で、文末に「入」の已然形「いれ」の結びをとるが、「読法」の「一而」によれば、終止形の「いる」であり、文法に通じない。また、「底」は誤訳である。

【原典】

渡辺三男によれば、この歌は『甲子夜話』巻十七に戦国大名伊達政宗（1567～1636）の歌とする説が見えている[14]が、これについて疑問がある。『甲子夜話』は江戸後期の随筆であり、肥前国平戸藩主、松浦静山の作である。天保十二年（1841）に成立し、『日本考』と伊達政宗の時代から遠いため、この説はまだ検討する必要がある。

高橋富雄氏は「伊達政宗と仙台藩」という講演で、次のように述べた。

> あるとき政宗は、武蔵野の広いことをよんだ古歌「武蔵野は月の入るべき山もなし 草より出でて草にこそ入れ」について、これは、野の広いことをよんだものとしてはよかろうが、月に対しては気の毒だとして、月を主にして、次のように替え歌をよんだのです。
>
> 「出づるより入る山の端はいづくぞと 月に問はまし武蔵野の原」[15]

(13) 渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985、p174。
(14) 渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985、p175。
(15) 高橋富雄.「伊達政宗と仙台藩」、『電学誌』107巻8号、1987、pp776-777。

「出づるより入る山の端はいづくぞと云々」という歌は「伊達政宗甲冑像」に記され、伊達政宗の自筆と言われる。この甲冑像は狩野探幽によって画かれ、政宗の和歌短冊に張り込まれた。これによって、「武蔵無山」は伊達政宗の歌ではなく、彼の時代よりもっと古い歌の可能性が高いと推論される。しかし、問題なのは文献記載がないことである。

野村八良の研究は我々に啓発した。この和歌について、野村は次のように指摘していた。

> 蓋し此の歌は、初めから一首ではなくて、連歌であらう。柳亭種彦の用捨箱に考証して、此う述べてゐる。それは元和頃の物と思われる扇の草紙と云ふ本に、草より出で々の歌がある、古い俳諧の附合でらう。さうして元和三年の徳永種久の紀行江戸めぐりにも既に之を引いて、云々と古い歌にも詠まれてゐると云つてゐるとある。(16)

また、柳亭種彦の『用捨箱』下ノ巻第十「俳諧の句と狂歌と誤る」にこの歌は「やく慶長の頃古歌なり」(17) と指摘した。慶長は1596～1615年であり、『日本考』は1592年にすでに刊行されたため、柳亭種彦の推論は検討する余地がある。そのほか、『あふきの草紙』と『徳永種久紀行』はともに元和年間（1615～1624）のものであり、『日本考』より遅いのは言うまでもない。

しかし、文献がある以上、『用捨箱』『あふきの草紙』『徳永種久紀行』三書における「武蔵無山」を比較しておきたい。『用捨箱』下ノ巻第十七丁には「むさし野は月の入べき山もなし草より出て草にこそいれ」(18) であり、『あふきの草紙』第七丁に載せた歌は「むさし野は月の入べき山もなし草より出て草にこそいれ」(19) であるが、『徳永種久紀行』の「ゑどくだり」には「むさしのは、月のいるさの山もなし、草より出て草にこそいれ」(20) と記された。『徳永種久紀行』における歌の第二句がちがい、作者あるいは編者が誤記したかと疑い、書陵部蔵『徳永種久紀行』写本を調べ、第二句も「月のいるさの」である。図書刊行会編『続燕石十種』の例

(16) 野村八良. 『武藏野とその文学』、武蔵野書院、1927、p78。
(17) 柳亭種彦. 『用捨箱』下、河内屋藤兵衛、1814、第十七丁。
(18) 柳亭種彦. 『用捨箱』下、河内屋藤兵衛、1814、第十八丁。
(19)『あふきの草紙』、和田維四郎、1917、第七丁。
(20) 図書刊行会. 『続燕石十種』第一、1909、p480。

言によれば、『徳永種久紀行』は黒川氏所蔵古写本によるのである。書陵部所蔵写本はこの黒川氏所蔵本であり、すなわち『続燕石十種』の底本である。ゆえに、江戸初期には少なくとも２種の「武蔵無山」が流布していた可能性がある。

前述のように、江戸初期の作品である『用捨箱』『あふきの草紙』及び『徳永種久紀行』で「武蔵無山」を「古き歌」とされていて、近世初期にはよく知られていた古歌のようであるが、『日本考』の時代はそれらより早いため、少なくとも中世末期にこの「武蔵無山」はすでに広がり、そして出典も不明になっていたと推論される。

また、福島邦道氏の研究[21]によれば、ロドリゲスの『日本大文典』（1604～1608年刊行）と山岡浚明の『類聚名物考』（江戸中期成立）「和歌部八」に「武蔵無山」の句がある。『日本大文典』は日本語学書であり、文法を中心に当時の日本語現象全般を豊富な具体例をあげて詳細に論述している。同書は次のように記している。

つきは草より出でて草に入る（謡）[22]

福島氏はこの「謡」が「謡曲」を指すかと疑ったが、今の謡曲にはこの和歌がまだ見つからない。筆者は、この「謡」は民謡、俗謡を指すと考えている。俗謡は民間で歌われるうたのことであり、「武蔵無山」の流布状況はこの歌の俗謡性を示している。また、『日本大文典』は宣教師ロドリゲスが編纂した本として、外国人が注意したものを記録した。ある程度、この歌の民間での知名度も証明できる。

また、福島邦道氏によれば、「武蔵無山」は『類聚名物考』「和歌部八」の「出所未考歌」条に入られている。『類聚名物考』は日本文物の類書中最初の、形式・内容ともに充実したものである。

◎作者不知「武蔵野は月の入べき山ぞなき草より出て草にこそいれ[23]

ここの歌は明らかに前述の歌と異なる。「ぞ」という係助詞を使い、「山」を強調する。そのほか、筆者の調べによると、この歌は同書「和歌部八」における「等類歌

(21) 福島邦道.「明代中国文献に見える日本の詩歌」、『言語と文芸』三九、1965-3。
(22) ロドリゲス著・土井忠生訳註.『日本大文典』、三省堂出版株式会社、1955、p405。
(23) 山岡浚明.『類聚名物考』、近藤活版所、1905、p215。

翻案」の部分もおかれる。

> ◎海より出てうみに入　○〔後撰集十九〕羈旅、つらゆき○土佐日記「宮古にて山の端に見し月なれと海より出て海にこそいれ「むさし野は～[24]

つまり、山岡浚明は、「武蔵無山」はある人が『土佐日記』の歌に基づいて翻案されたものだと認めた。ゆえに、この歌は本当にあるかどうかに疑っている人がいる。福島氏によると、浅茅庵は次のように指摘していた。

> 續古今、秋、道房卿、
> むさしのは月の入べき山もなし尾花が末にかゝるしらくも
> むさし野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそいれといふ歌は、何に有るに歟。[25]

『続古今和歌集』を調べた結果、「武蔵野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかゝる白雲」という歌は大納言通方の歌がわかっている。大納言通方は、源通方という人で、土御門大納言ともよばれた。しかし、筆者の調べた限り、源通方は道房卿と呼ばれることはなかった。「道房」と「通方」は字形が近いため、前者は後者の誤りの可能性が高い。

また、源通方の歌のみならず、「武蔵無山」は藤原良経の「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月かげ」及び前述の「みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」のまねをすることがわかる。四首の歌を並べると、似ているところが明らかである。

> 「武藏無山」:むさしのは月の入べき山もなし草より出て草にこそ入（『日本考』）
> 源通方：武蔵野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかゝる白雲（『続古今和歌集』）
> 藤原良経：行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月かげ（『新古今和歌集』）

(24) 山岡浚明. 『類聚名物考』、近藤活版所、1905、p214。
(25) 浅茅庵. 『清話抄』（下）、和泉屋庄次郎、1820、第四十丁。

紀貫之：みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ（『土佐日記』）

総じて言えば、「武蔵無山」は伊達政宗の歌ではなく、近世初期にはよく知られていた古歌のようであるが、筆者の調べた限り、『日本考』より早い文献がまだ見つかっていない。そして、歌の内容と構成は上述の三首の歌をまねたところが見える。

では、なぜこの歌を中国に広めたのか。武蔵野は「どこまでもつづく原野」及び「月の名所」として、日本古来様々な文芸作品、美術・工芸作品の題材になった。『万葉集』の時代から名所に位置づけられた武蔵野は、八幡船に乗った海賊の心の中に日本文化のシンボルかもしれない。中国の西湖に似ている。中日両国正式な外交ではなく、文化交流の一環として、名所である武蔵野の美しさを誇り、大陸の人々にアピールしたがったと思われる。

【翻訳】

武蔵野は山が無いので、月は草より出でてまた草に入る。

「切意」はまさにこの意味を伝えていた。

三、暴雨譬瘡

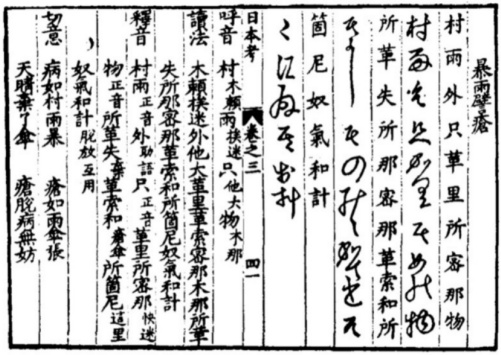

図3　「暴雨譬瘡」

【翻刻】

村雨外只革里所密那物所革失所那密那革索和所箇尼奴氣和計

村雨は只かりそめの物ぞかしそのみのかさをそこにぬぎおけ

呼音　村[注一]木頼　雨[注二]挨迷　只他大　物木那

読法　木頼挨迷外他大革里革[注三]索密那木那所革失所那密那革索和所箇尼
　　奴氣和計

釈音　村雨正音外助語只正音革里所密那快迷[注四]物正音所革失棄[注五]革索和瘡傘[注六]所箇尼這里
　　奴氣和計脱放互用[注七]

切意　病如村雨暴 瘡如雨傘張 天晴棄了傘 瘡脱病無妨
　　（病は村雨の暴るゝが如く 瘡は雨傘の張るが如し
　　天晴れて傘を棄て了り 瘡脱し病妨くる無し）

【注釈】

注一：村木頼（むら）。「以路法四十八字様音註表」によれば、音注漢字「木」は「む」と「も」を表すが、ここは「むら」に違いない。一字で二つの仮名を表す現象は稀ではない。例えば、「羅」と「落」はどちらも「ろ」と「ら」を表す。外国人にとっては、音の類似を示している。

注二：「雨」は「挨迷」（あめ）と読めるが、「村雨」は普通に「むらさめ」と読んでいる。故に、「以路法四十八字様音註表」によれば、音注漢字で「作迷」・「索迷」のように表記するほうが適当である。

注三：「革」は衍字である。

注四：「革里所密那」（かりそめの）は名詞・ナリ活用形容動詞「かりそめ」プラス格助詞「の」である。「かりそめ」は「一時的だ。はかないこと」という意を表すため、渡辺三男は、「快迷」は「快速」の誤りと指摘した。

注五：「所革失」（ぞかし）は係助詞「ぞ」プラス終助詞「かし」であり、文末に用いて念を押して強く言う意を表す。故に、釈音の「棄」は誤訳である。

注六：「革索和」（かさを）は名詞「かさ」プラス格助詞「を」である。ここに掛詞がある。「みのかさ」は「蓑笠」と「身の瘡」を表し、村雨は間も無く止み、蓑笠はここに脱げるように、かりそめの瘡も癒される。

注七：「奴氣和計」（ぬぎおけ）は複合語で、「脱ぎ」プラス「置け」である。「釈音」に「脱放互用」（脱と放はどちらも使える）と解するのは複合語に分けて理解したのである。

【原典】

筆者の調査によれば、此歌は「病める小野小町」の話に繋がっている。即ち小野小町が悪瘡に苦しめ、薬師に「南無薬師諸病悉除の願立てて身より仏の名こそ惜しけれ」と歌を詠むと、薬師から「村雨はただ一時のものぞかし小町が蓑瘡そ

こに脱ぎおけ」と返歌があり、病が全快したという伝承である。また、小堀光夫氏の研究[26]によると、関連伝承は関東多くの地域に広がっている。

> 関東の小野小町伝承では、京都から奥州に向かって旅をしていた小町が旅の途中で病にかかったとか、病を治すため関東に来たという病の小町伝承の多いことに気がつく。また婦人病、皮膚病等の病気治しの民間信仰とも結びついている。[27]

その中に、小町は瘡にかかる伝説は町田市、富岡市などの地域に広めていた。薬師霊験譚の一つである。しかし、瘡にかかる主人公は小町のみならず、和泉式部、あるいは他人になる場合も少なくない。例を挙げると、菅江真澄『雪の出羽路雄勝郡』(1822) には、次のような記事がある。

> ◯寺田薬師如来ノ社 別当蓮乗院
>
> 〔古くは寺田山薬師寺といひし天台宗の寺ありしともいへり。〕郷民の物語に、いにしへは小野小町老て故郷に帰り来て小野に住けるに、瘡の出たるを憂て此社に通夜しねぎごとしていのりつれど、つゆのしるしもあらざればうらみ奉りて、
>
> 南無薬師衆病悉除の神なれば身より仏の名こそ惜しけれ
>
> とぞ堂の柱に書つけ々る。こは、衆病悉除身心安楽といふ薬師本願経の意をもてよめるにこそあんなれ。其夜の夢の中に神出まして、
>
> 群雨は唯一ト時トのものなればそこにぬぎおけおのがみのかさ
>
> 夜明れば、かひぬぐいたるがごとく身の瘡ひとつなく癒へたりとなむ、歌ここ々ろこそ叶ひつらぬ。已と小野とは仮字のかなはざる、薬師仏もかなづかひはえしり給はぬ事かとひとりほ々ゑまれたり。
>
> これをおもふ、むかし泉式部悪瘡になやみ京の平等寺の因幡堂にまうでゞ、
>
> 南無薬師衆病悉除の願なれば身より仏の名こそ惜しけれ
>
> と口号み礼しければ、内陣の奥より微妙の御声にて、

(26) 小堀光夫.「関東の小野小町伝承」、『口承文芸研究』(23)、2003。本節に挙げた伝説用例はこの論文を参考した。
(27) 小堀光夫.「関東の小野小町伝承」、『口承文芸研究』(23)、2003。

村雨はしばしのほどに通り行其身のかさをこゝにぬぎおけ

これは稲葉堂の縁起のよし也。みなおなじさまおなじこゝろの歌也、いづらも作りものがたりにや、いずれのかたかさもあらむか、かえりて寺田の薬師ほさつの返歌、また小野小町のいへるかたよくぞ聞えたる。(28)

ここに菅江真澄が瘡の小町伝承と瘡の和泉式部の薬師霊験記をともに記録した。

また、『三国名勝図会』(1843) が記した法華嶽の伝承では、主人公は和泉式部になっている。

上東門院の女房和泉式部、癩病を患へしが、種々の医療験なきゆゑに、京都清水の観音に参篭しけるに、米山、鳳来寺、法華嶽寺、三所の薬師に祈るべき夢告を受く、於是米山、鳳来寺に至て、参篭せしかども其験なし、因て遥に日州に下り、法華嶽の薬師へ参篭すといえども、其応験を得ざりければ、此世の業縁は、是までなりと思ひて、身を墜して死せんと、志を定め、辞世に、

南無薬師病悉除の願立て身より佛の名こそをしけれ

と詠じ、既に合掌閉目して、千尋の崖より自ら墜けるに、不思議に救ひ助られ、一異人式部の眼中に現じ、其手を取しと覚えて、

村雨は只ひと時のものぞかし己が蓑笠そこにぬぎおけ

といふ声の下に数年の沈痾忽然として平癒し、玉坊瓊姿に復し、再び京に帰る。(29)

ここでは、和泉式部はハンセン病患者となってしまい、ハンセン病は瘡とともに皮膚病である。

そのほか、『新撰狂歌集』(1629～1644か) には次の内容がある。

むかし五条・高辻に住ける人、瘡をいたはりて因幡薬師へこもりて

南無薬師諸病失除の願なれば身より仏の名こそ惜しけれ

(28) 秋田叢書刊行会. 『秋田叢書』第3巻『雪の出羽路雄勝郡』、秋田叢書刊行会、1929、pp107-108。

(29) 五代秀堯・橋口兼柄編. 『三国名勝図会』19巻之55-57、山本盛秀、1905、第19丁-20丁。

とよみければ、内陣より返し
村雨はたゞ一時のものぞかしをのが蓑笠そこに脱ぎおけ[30]

主人公は京都五条・高辻に住む人になっている。

しかし、小堀光夫氏の研究を整理すると、伝説を記録した文献は、上述の三冊のみならず、ほかの全部も江戸時代のものである。小野小町と薬師霊験譚を中心に、数多くの伝承が残っている。薬師や薬師堂を管理する寺はこれらの伝承を筆録し、例えば東京都町田市小野路「小野山萬松寺」の『小野山萬松寺略縁起』、群馬県富岡市相野田「小野山祇祥真院得成寺」の『小野山略縁起』、栃木県下都賀郡岩舟町小野寺「小野寺山転法輪院大慈寺」の『小野寺旧記』などがある。[31]

また、湯浅佳子氏の研究によれば、「病める小野小町」の話は近世期以後多くの文芸作品に取り入れている。例えば、文化十三年（1816）識の『小野小町翁噺』（梅流山人作）、天保元年～嘉永元年（1830～1848）刊行の合巻『小野小町　浮世源氏絵』（山東京伝作）などがある。『小野小町翁噺』で小町が受けた皮膚病は、『小野小町　浮世源氏絵』で乳房の下の赤い黒子として描かれる。[32]

以上の地誌、寺の略縁起及び文芸作品などの文献は全部江戸時代のものであり、中世の資料を引き続き追究する必要がある。

【原典との対比】

小野小町の関連伝承は複雑のため、和歌の表現もそれぞれであるが、意味はだいたい同じである。

【翻訳】

村雨は一時的なものだよ。蓑笠を間も無く脱げるように、身の瘡も直ちに落ちて癒えられる。

「切意」は掛詞を訳し、和歌の意味を基本的に伝わってくる。

終わりに

本稿は「新歳挙筆」、「武蔵無山」及び「暴雨譬瘡」という三首の和歌に関する伝

(30) 岩崎佳枝ら校注.『新日本古典文学大系』第61巻『新撰狂歌集』、岩波書店、1993、pp86-87。
(31) 小堀光夫.「関東の小野小町伝承」、『口承文芸研究』(23)、2003。
(32) 湯浅佳子.「小野小町伝説の一系譜：病める小町の話」、『東京学芸大学紀要』(51)、2000-2。

承及び解釈上の問題点などを検討した。この三首の歌はいずれも民間に広く伝わる作品である。筆者の調べた限り、『日本考』より早い文献がまだ見つかっていない。前述のように、すでに判明した原典は『古今和歌集』などの勅撰集及び『寂蓮法師集』などの私撰集のみならず、『源氏物語』などの古典物語、『うすゆき物語』などの仮名草子、『船弁慶』などの謡曲及び本稿で検討した民間伝承に散在している。和歌の出典が非体系性を持っている点は『日本考』所収和歌の特徴の一つである。

もう一つの特徴は音注漢字が複雑な様相を有することである。特に説明したいのは、一字で二つの仮名を表す現象である。例えば、『日本考』に時々「外」で「は」を表すが、音註表によれば「外」は「わ」の音注漢字である。「外」は泰韻の字であり、そのほかに佳韻の「歪」、卦韻の「画」も「わ」の音注漢字として圧倒的に用いられる。「外」「歪」「画」は全て合口の字のため、大友信一氏によると、介母の〔-w-〕の要素の存在がある。(33) また、「は」の音注漢字は乏韻の「法」及び月韻の「発」がもっとも多く、唇歯音の様子を示している。そのため、大友氏は「は」が〔-Φa-〕と推定した。(34) 故に、「外」は「わ」の音注漢字として使用されるのは妥当であるが、「は」の音注漢字としてはふさわしくない。しかし、同書における「外」で「は」を表す用例は、基本的に係助詞である。つまり、編者は「外」で〔-wa-〕という発音を表すだけであり、「は」と「わ」を区別しなかった。

本稿で挙げた資料は『日本考』の時代より遅いため、今後の課題として伝承に関する文献を引き続き探求していきたい。

参考文献

渡辺三男.『新修訳注日本考』、新典社、1985。
福島邦道.「明代中国文献に見える日本の詩歌」、『言語と文芸』三九、1965-3。
胡暁暉.「『日本考』所収和歌考釈——私撰集を中心に」、『東アジア文化研究』(7)、2022-2。
野村八良.『武蔵野とその文学』、武蔵野書院、1927。
小堀光夫.「関東の小野小町伝承」、『口承文芸研究』(23)、2003。
湯浅佳子.「小野小町伝説の一系譜：病める小町の話」、『東京学芸大学紀要』(51)、2000-2。
大友信一.『室町時代の国語音声の研究』、至文堂、1963。

(33) 大友信一.『室町時代の国語音声の研究』、至文堂、1963、p569。
(34) 大友信一.『室町時代の国語音声の研究』、至文堂、1963、p566。